くらがの

発行所　倉賀野神社
〒370-1201
群馬県高崎市倉賀野町 1263 番地
電　話　027-346-2158
ＦＡＸ　027-346-2184
例祭（秋季大祭）　10 月 19 日
春季大祭　　4 月 19 日
公式ホームページ　www.chinju.info/

御本殿の釣灯篤

ここに紹介するのは、明治五（一八七二）年四月に奉納された真鍮の釣り灯篤一対である。

嘉永六（一八五三）年に御本殿の建て替えを発起してより、御造営が完成し遷宮式が行われたのが慶応二（一八六六）年九月のこと。その後も氏子の御奉賛により殿内の整備が進められていたことがわかる。

灯篤は御本殿屋根の唐破風からつり下がる。その底面円周部の、六個のハート型文様に気づかれよう。日本古来の「猪目」とよばれる文様である。

奉納者名が灯篤の底面に刻まれるとともに、別に寄附板としても奉掲されている。見ると、時代はまだ明治になったばかりで、倉賀野宿の旅籠や造り酒屋の屋号が列なる（左掲）。金額の表示も「両」建てである。明治四年五月に一両を一円とする「新貨条例」が制定されてから間もなくの頃であった。

真論燈篤　一対　寄附連名

一金一両　三ツ蔦屋権四郎
一同断　新城屋五郎平
一同断　叶屋又五郎
一同断　林屋富八
一同断　黛新七良
一同断　西村屋嘉平次
一同断　吉田屋幸吉
一同断　加賀屋彌平
一同断　河内屋平九郎
一金二分　松本勘十郎
一同断　浅見金吾
一同断　中野屋幸吉
一同断　岡本屋冨蔵

一金二分　丸十一屋新平
一同断　橋本屋金十良
一同断　若狭屋辰五良
一同断　吉田屋久平
一同断　嶋屋次之助
一同断　大津屋豊吉
一同断　新井屋佐七
一同断　若松屋金次良
一同断　近江屋嘉平
一同断　八百屋亀八
一同断　江原藤平
一同断　三国屋□造
世話人　新井平九郎
西村屋嘉平次
山田金十郎
小嶋弥平
明治五壬申歳四月一日奉納之

釣燈篤の底部を見上げると、ハート型の猪目文様が見える。

御本殿唐破風の釣燈篤一対。

ご挨拶

宮司　髙木直明

氏子・崇敬者の皆様には日々健やかにお過ごしのこととお慶び申し上げます。

倉賀野神社の創始は第一〇代崇神天皇の御代の二千年の昔に溯ると伝わります。御本社の主祭神である大國魂大神さまは古来、地域の産業振興とともに、医薬と縁結びの御神徳あらたかといわれています。境内神社として学問の神・天神社、商売繁盛の神・冠稲荷社、無病息災の神・北向道祖神社、金運の神・甲子大黒天社がまつられています。

また御本社の背後に鎮まる末社では、風の神、雨神、海神、火神、金神、山神、木神、土神、水神と大年御祖神の一〇神に参拝して、遥か伊邪那岐命・伊邪那美命の国生みの神業の世界に誘われます。

ご参拝の皆様には鎮守の杜のご神気をいっぱいに戴きまして、愈々益々ご清栄なられますよう、心からご祈念申し上げる次第です。

毎月一日の月次祭

皇室の弥栄と国と地域の安全、そして我が家の繁栄を氏神様に祈念いたします。

毎月１日の午前６時３０分より。（１月元旦を除く）

ご昇殿なさった後に神事を行い、７時前には散会となります。通勤通学の朝にも参拝なさってはいかがでしょう。

鎮守のたより

マンリョウ（万両）

正月に縁起物とされるマンリョウ。二十年くらい前に蒔いた種子が、いま境内のあちこちに育っている。直立した茎と肉厚の葉が特徴で、すぐにそれとわかる。写真は九月下旬に手水舎の近くで。赤く（あるいは種類によっては白く）色付く前のまだ緑の実がたわわについている。そこに夏の名残のセミの抜け殻。ハイゴと呼んで無心に拾い集めていた昔を懐かしむ。

倉賀野神社奉賛会のご案内

本誌（倉賀野神社 社報）は、倉賀野神社奉賛会の皆様のお手元に会報として春・秋の年２回お届けしているものです。

奉賛会の会費御浄財は⑴祭典の執行、⑵文化財の維持保全、⑶伝統芸能の継承、⑷鎮守の杜の保護育成などに大切に活用されます。

すでにご加入の皆様には日頃からのあたたかいご協力に心から感謝申し上げます。また新規にご縁をいただいた皆様にも、どうぞ奉賛会にご加入くださいまして、大神様の厚い御神徳をたまわりますようご祈念いたします。皆様のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。

奉賛会　年会費	
○正会員	一口 二千円
○特別会員	一口 一万円

お問い合わせ・お申し込みはご近所の神社総代、または直接社務所にご連絡ください。

社務所☎ 027(346)2158

祝祭日には国旗を掲げましょう。

北鳥居脇に石玉垣が完成

完成したのは、これまで金網で仮普請されていた、北鳥居の東側六メートル余の部分。石玉垣は第六十二回伊勢神宮式年遷宮と、本神社の参集殿完成を奉祝して築造されたものである。皆様の御奉賛と御協力に心より感謝と御礼を申し上げます。

春祭りに仲町の山車が参拝

四月十九日の春季大祭に仲町山車（倉賀野町仲町文化財保存会）の一行が町内を巡行し、倉賀野神社にお目見えした。今回の参拝は「仲町山車倉改修三十周年」を記念しておこなわれたもので、平成二十年秋祭の参拝以来のこと。子供たちが元気にお囃子を奉納演奏して、参拝者の喝采を浴びていた。

神饌田「抜穂祭」を前に

境内の神饌田が実りの秋を迎えた。神社総代会と倉賀野中生徒有志の参加のもと、今年は十月十三日に抜穂祭（稲刈りの儀式）をおこない、御初穂を例大祭の神前にお供えする。同時に、近隣の農家からも収穫の稲穂をご献納いただき、社殿の正面両脇に懸税として吊り下げてお供えする習わしである。

秋祭りに向けて舞の稽古

倉賀野小、倉賀野中の児童生徒十六名が、いま舞の稽古に熱心に取り組んでいる。豊栄舞と浦安舞で、十月十九日の例大祭の神前に奉奏される。

やるベンチャーウィーク
中学生が神社で職場体験

六月、毎年恒例の体験学習「やるベンチャーウィーク」がおこなわれ、倉賀野中二年生の生徒十九名が三日間に分かれ、それぞれ神社の一日を過ごした。境内の清掃に始まり、神職の作法や和琴の演奏を実地体験。また、大和言葉で大祓詞という祝詞を奏上した。

昼食の際の食前感謝・食後感謝の儀式では、本居宣長による和歌「たなつもの百の木草もあまてらす日の大神のめぐみえてこそ」「朝よひに物くふごとに豊受の神のめぐみを思へ世の人」と、一同が声に出して歌い上げた。生徒からは「緊張もしたけれど、楽しかった」との感想が聞かれた。

「食前感謝」の儀式。稽古した通りに和歌を朗々と歌い上げた。

夏越の大祓・茅輪くぐり

六月三十日の午後六時、恒例の夏越大祓式がおこなわれた。一年の折り返し点を迎えて、半年間のつみ・けがれを祓い除ける恒例の儀式である。参列者は茅輪をくぐって参拝。そのあと社殿内に入り、「大祓詞」を一同で神前に奉唱した。また「身代わり人形」で全身を撫で、これに託して、災厄を祓い清めた。

なお、十二月三十一日（午後三時）には「年越の大祓式」がおこなわれる。新しい年をすがすがしく迎えられるよう、広く氏子崇敬者の皆様に参拝のご案内をしています。

6月３０日の夏越大祓式

神棚のこと、「お正月さま」のこと、などなど（2）

前回は「お正月さま」の御神札一そろえについてお話ししました。それをもう一度、見てみましょう。

「お正月様」御神札のまつり方の一例。神宮大麻（お伊勢さま）はつねに中央におまつりします。

写真の①が「神宮大麻」。或いはお伊勢さま、大神宮さまとも呼びます。②は「年神さま」、③は「年中祓」、④は「三本荒神さま」です。倉賀野町の氏子近隣地域で昔から新年を迎えるにあたり、神棚におまつりしてきたものです。前号ではそれぞれの御神札について説明させていただきました。なお、写真はまつり方の一つの例として示したもので、じっさいにはそれぞれの家の習わし、或は神棚のかたちなどにより、いろいろに異なることがあってよいでしょう。

例えば③「年中祓」は神棚でなく玄関先に貼ってまつる習わしもあります。また④「三本荒神さま」を台所におまつりするおうちも少なくありません。そして「倉賀野神社」の春祭りの御神札を受けたり、さらに地元以外にも特に崇敬する神社がある場合など、御神札の数もだんだん増えてまいりましょう。すると神棚のなかも、だんだん狭く混んでまいりましょう。そう、日本は「八百万の神様」の国ですから、いっそう神様のご守護をいただくことで、それは喜ばしいことなのです。

ただし、いずれの場合にも①の「神宮大麻」（お伊勢さま）をいちばん中央におまつりすることが大切です。なぜなら神宮大麻は、日本の国の中心である皇室の御祖先神天照大御神の大神璽（おおみしるし）だからです。

なお、年毎に新しい御神札をまつり、一年を経た御神札は、これまでの御守護に感謝をこめて、神社に返納するのが古来の習わしです。　（続く）

お問合せ先　倉賀野神社社務所
☎027（346）2158

日光例幣使道と倉賀野

徳川家康公四百年祭の年に

◎倉賀野は日光例幣使道の起点

ことしは徳川家康公薨去四百年の年に当たる。家康公を祀る日光東照宮ではこの春「四百年式年大祭」がおこなわれた。

江戸時代、日光東照宮の春の例祭に合わせて、二〇〇年以上にわたり、毎年朝廷の使者が通ったのが「日光例幣使道」である。明和元（一七六四）年に五街道と共に道中奉行の支配に属することとなり、幕府も重要視していた街道であったことがわかる。例幣使一行は京を出発して中山道を進み、この倉賀野宿で分岐して日光山へと向かった。

◎慶応元年の例幣使

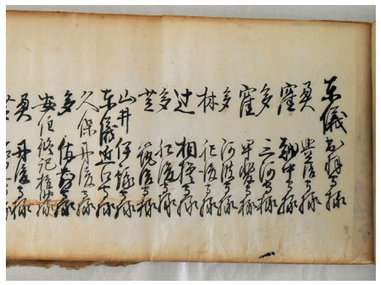
朝廷から東照宮例祭への使者（奉幣使）の発遣は、正保三（一六四六）年が始まりで、翌正保四年に毎年の例幣使の制度が定まったものという。その五〇年毎の節目は「御神忌」として例年に倍し盛大であった。元治二年（一八六五年、同年四月七日に慶応と改元）の四月は二百五十回忌にあたる年であった。当時の神主高木出雲の日記『納戸日記諸事控簿』を見ると、

「元治二年乙丑四月　日光　御神忌二付　宮様御公家様其外御警衛御役人様御通行二付　四月朔日ヨリ」と書き始めている。そして「三月十七日出立　着座門跡　梶井宮様」、さらにその先には「四月朔日出立　例幣使　中御門中将様」とある。

神主出雲は、宮家や公家、警護役人等約百五十人の人名を、京を出立した日別に、丁寧に書き写している。情報は、一行の到着を待ち受ける倉賀野宿役人から入手したのであろうか。日記によると、隣接する幕府直轄の岩鼻役所から「継立人馬御手当賃銭」として金百二十八両と銭八百五十貫文余を宿役人が事前に預かっていたこと、それにもまして宿や助郷村々の負担が甚大であったことなどが読み取れる。

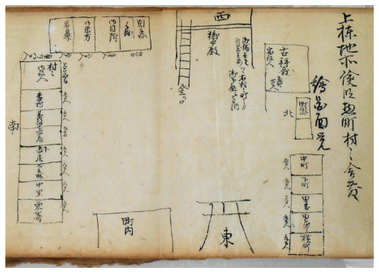
◎一行のなかに三方楽所の雅楽師も

日光御神忌には朝廷の三方楽所（京、大阪、奈良を拠点とする伝統的な雅楽集団）の雅楽師が随行し、雅楽や舞楽を奉奏したといわれる。記録の中にもそれと符合する人名が列挙されている。東儀出羽守（大阪天王寺方）、奥豊後守（奈良南都方）、窪越中守（同）、多三河守（京方）等で、楽家の姓を名乗る三十六人が並ぶ。例幣使一行について「入魂」と称して金子をせびったという悪評がよくいわれるが、一方で朝廷文化の地方伝播に果たした役割にも目を向けるべきであろう。


三方楽所の雅楽師（納戸日記諸事控簿）

◎同年の春、飯玉宮では上棟祭

元治二年の三月下旬から順次、京を出立した一行は、四月上旬に倉賀野宿に入った（例年の通り、宿泊はせず）。これに先立ち、御造営工事を進めていた飯玉宮（現在の倉賀野神社）の上棟式が三月十九日におこなわれていた。同じく『納戸日記諸事控簿』の「上棟地所倹段惣町村々舎敷　絵図面覚」によると、世話人、宿役人、宿内各町、さらに近隣七ヶ郷村々役人、高崎役所、岩鼻役所などが上棟式に出席した。大工十五人、木挽八人、彫師三人、仕事師十六人も参加した。連続する一大行事に町中がてんてこまいであった。


「上棟地所倹段惣町村々舎敷　絵図面覚」（納戸日記諸事控簿）

◎日光例幣使の始まりと時を同じく創建された宿内の八幡神社

倉賀野・田屋町の通称「井戸八幡様」は、正保三年三月二十三日、倉賀野古城跡の井戸の中から霊験あらたかに御出現になり、高崎城主安藤対馬守の崇敬厚く、同地に神社が創建されたと伝えられる。その年が前述のごとく倉賀野を起点とする日光例幣使道のはじまりの年であったことに、改めて気づかされるのである。以来例幣使は一年の休みもなく通行が続いたが、幕府の大政奉還により慶応三（一八六七）年の二百二十一回目を最後とした。八幡さまは、いまも変わらず御鎮座している。